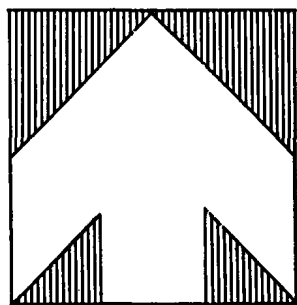
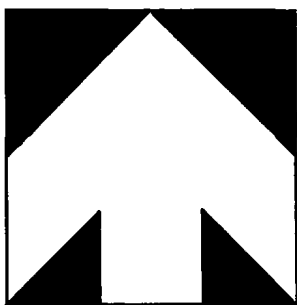
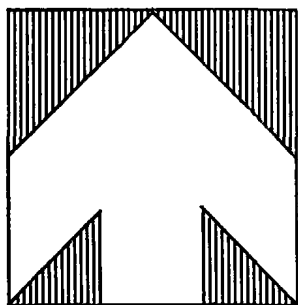


白井佐敏 著

會計思想史序説

— 複式簿記と損益計算 —

東京 白桃書房 神田



著者紹介

しら い さ とし
白 井 佐 敏

略 歴 1920 年 愛知県豊橋市に生まれる
1946 年 大阪商科大学卒業
大阪商科大学経済研究所研究員
1949 年 大阪市立大学商学部助手
1954 年 同学部助教授
1964 年 同学部教授、現在に至る
1966 年 経済学博士(九州大学)
著 書 「複式簿記の史的考察」(1961 年、森山書店)
「近代会計学原理」(1977 年、森山書店)
現住所 〒592 高石市東羽衣 7-12-3

著者との申し
合わせにより
検 印 省 略

会計思想史序説——複式簿記と損益計算——

昭和 55 年 12 月 2 日 初版発行

著 者 白 井 佐 敏
発 行 者 大 矢 順 一 郎
印 刷 者 荻 部 哲 夫

* * *

発 行 所 株式会社 白 桃 書 房

〒 101 東京都千代田区外神田 5-1-15
電話(03)836-4781(代) 振替東京0-20192

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。 荻部印刷/日進堂製本

書籍コード 3034-360397-6915

序

本書は、特に 16 世紀のヨーロッパにおいて公開された主要な簿記著作を研究の対象にとりあげ、そこでの会計思想、なかんずく損益計算思考の展開過程を明らかにしようとしたものであって、序章と、3つの編をもって構成されているのである。

まず、序章においてわたくしは、わたくしの会計史研究の方法を明らかにするため、ヤーメイ Yamey, B.S. 教授の所説を手がかりに、特にこの時代における複式簿記の決算手続の意義に関連して、「狭い簿記の目的」のみを認めて損益計算上の意義は否定ないし過小評価しようとする一部の傾向に対し、わたくしなりの疑問と異論を提示した。いうまでもなく、現実の複式簿記は、歴史的な資本主義企業の簿記として与えられている。したがって、その決算手続の意義について考察しようとする場合にも、過程の全面的な把握のためには、勘定の整理、検証、繰越のための狭い簿記の目的か、それとも損益の計算かといったふうに、この両者を機械的に切りはなして議論するのではなしに、むしろ、この両者のいわば対立と統一の観点こそが必要なのではなかろうかと、わたくしは考えるのである。

もっとも、この点の主張のためには、何よりも、資本主義生成のこの時代において、いかに損益計算思考が与えられ、またそれがいかなる展開の過程を示すに至っているかを、明らかにしなければならないであろう。かくして、まさしくこのような問題の意識に基づいてわたくしは、まず第1編において、16世紀前半におけるいわゆるドイツ簿記の展開過程とその特質を究明し、その重要な特徴のひとつが、単純かつ素朴な形式の下においてであるにもせよ、彼らのいわゆる「簿記の検証」思考、すなわち商品元帳での損益法的損益を、債権債務元帳に基づく財産法的損益によって検証しようとする考え方にあることを明らかにした。そして、さらに第2編においては、ほぼ同じ時期でのイタリア簿

ii 序

記の展開過程を、特にドイツ簿記との比較の観点において検討し、それがすでに期間損益計算の形式を示しながら、しかもまさしく口別損益計算の場合と同様な、貸借平均原理に基づく残高勘定の複式簿記的検証機能を強調するにすぎないという点に、その特徴のひとつを見出したのであった。

しかしながら、期間損益計算思考のいっそうの深化は、当然に、イタリア式の複式簿記の体系の下でも、損益勘定と残高勘定との照合の関係、さらには財産法的損益と損益法的損益との一致といったような、口別損益計算の下では明らかに成立しえなかった関係の認識を可能にするとともに、また現実的に展開することともなるであろう。かくして、特にこの点を、ピール Peele, James とステヴィン Stevin, Simon の著作についての詳細な検討を通じて、具体的に論証しようとしたのが第3編であり、その意味においてそれは、いわば本書の主要な結論部分を構成しているのである。

もっとも、本書のなかの各章は、最後の章を除いて他はすべて、それぞれ別個の機会に独立の論文の形式において発表されたものであり、したがって、本書への収録にあたっては、さらに加筆、整理のうえ、論旨のいっそうの明確化と一貫性の保持に努めたつもりであるが、なお若干の重複を避けることができなかった。あえて大方の御寛恕をお願いする次第である。

なお、私事にわたって恐縮であるが、本書の刊行は、わたくしの還暦に際し、わたくしのゼミナールの卒業生諸君が企画してくれた記念事業のひとつである。この機会に改めて、実行委員会の各位と、御協力を頂いた卒業生諸君に心からの御礼を申し上げるとともに、各位のいっそうの御活躍、御幸福をお祈りするものである。最後に、本書の刊行にあたり、卒業生のひとりである名古屋市立大学の國村道雄氏と、白桃書房の照井規夫氏に一方ならぬ御配慮を賜わったことを付記して、衷心より謝意を表したいと思う。

1980年10月

白井佐敏

目 次

序 章 資本主義の生成と複式簿記	
——16世紀会計史研究の一視角——	1
Ⅰ 序言	1
Ⅱ ゾムバルトの見解	3
Ⅲ ヤーメイの見解	8
Ⅳ ヤーメイ説の検討(1)	
——口別損益計算について——	14
Ⅴ ヤーメイ説の検討(2)	
——期間損益計算について——	17

第1編 ドイツ簿記の展開過程とその特質

第1章 ドイツ簿記と代理商簿記	
——グラマテウスとメンヘル——	25
Ⅰ 序言	25
Ⅱ グラマテウスの簿記書	26
Ⅲ メンヘル の簿記書	36
Ⅳ 結言	46
第2章 ゴットリープの簿記書	
——ドイツ簿記の特質について——	49
Ⅰ 序言	49
Ⅱ ゴットリープ簿記書の特質(1)	51
Ⅲ ゴットリープ簿記書の特質(2)	57
Ⅳ 結言	63

第3章 ドイツ簿記とイタリア簿記	
——シュヴァイカーの簿記書を中心に——	65
Ⅰ 序言	65
Ⅱ シュヴァイカー簿記書の歴史的意義	66
Ⅲ シュヴァイカー簿記書の問題点	72
Ⅳ 結言	76

第2編 イタリア簿記の展開過程とその特質

第1章 イタリア簿記の展開	
——パチョリ、イムピン、シュヴァイカー——	81
Ⅰ 序言	81
Ⅱ イムピン簿記書の特徴(1)	
——合計転記と管理の手法——	83
Ⅲ イムピン簿記書の特徴(2)	
——口別損益計算と期間損益計算——	87
Ⅳ イムピン簿記書の特徴(3)	
——帳簿の締切と再開——	95
第2章 ガムマースフェルダーの簿記書	105
Ⅰ 序言	105
Ⅱ ガムマースフェルダーの簿記形式	107
Ⅲ ガムマースフェルダーの損益計算思考	114
第3章 決算様式の進化について	
——ピールとガムマースフェルダー——	123
Ⅰ 序言	123
Ⅱ ピールの決算様式	124
Ⅲ ガムマースフェルダーの決算様式	133
Ⅳ 結言	140

第3編 複式簿記と期間損益計算

第1章	ビール簿記書の展開	145
Ⅰ	序言	145
Ⅱ	ビールの複式簿記論	146
Ⅲ	ビールの簿記形式	155
Ⅳ	ビールの損益計算思考	163
Ⅴ	ビールの管理思考 ——積送品取引と組合会計——	169
Ⅵ	ビールの決算様式	174
Ⅶ	ビールと期間損益計算 ——小売業会計——	179
第2章	ステヴィンの簿記書	187
Ⅰ	序言	187
Ⅱ	ステヴィンの勘定理論(1) ——物財勘定と名目勘定——	188
Ⅲ	ステヴィンの勘定理論(2) ——2つの資本概念——	196
Ⅳ	ステヴィンの損益計算論	200
Ⅴ	ステヴィンの決算様式論	207

序 章 資本主義の生成と複式簿記

——16世紀会計史研究の一視角——

I 序 言

複式簿記は、資本主義経済の生成と発展に対して、果たしてどのような意義をもち、あるいはどのような貢献をなしたものと考えることができるであろうか。一般に、会計史の研究において、このような複式簿記の歴史的機能に関する考察が、きわめて重要な意義をもつものであることはいうまでもない。しかしながら、ひとしく複式簿記の歴史的機能を問題とする場合でも、従来、ともすれば、複式簿記の生成し発展してきた経済的、社会的な環境諸条件の分析に重点がおかれ、それらの諸要求にいかに対応したかという形で、いわば間接的、受動的にとりあげられる傾向が強かったようにわたくしには考えられる。したがって、その意味からすれば、例えばヤーメイ Yamey, B.S. が、彼の1949年の論文、「科学的簿記と資本主義の成立 Scientific Bookkeeping and the Rise of Capitalism」、さらにはそれに続く一連の諸論稿において、この複式簿記の機能の問題を、いわば正面から、より一般的、直接的に、いわゆるゾムバルト・テーゼ Sombart's thesis の批判の形でとりあげたということは、まさしく複式簿記の本質認識の問題にも通じるべきものとして、きわめて注目し値するといわなければならないであろう。

この論文の冒頭において、彼はつぎのように述べている。「経済史家たちは、体系的簿記(すなわち複式簿記)が近代資本主義の発展と成立にとって必須のものであったということを、種々の程度において強調してきた。その命題は、もし科学的会計が、用具として企業家の手中に存在しなかったとするならば、『無限の利益の合理的追求』ということも可能ではなかったであろうし、ある

2 序章 資本主義の生成と複式簿記

いはかくも効果的ではありえなかったであろうというのである。事実、ウェーバー Weber, Max は、合理的な資本主義の制度を、資本会計をもつ制度、すなわち、近代簿記の方法に従った計算と残高表 a balance の作成とによってその収益力を決定する制度、と規定するまでに至ったのであった⁽¹⁾。そして、このようなゾムバルト Sombart, Werner⁽²⁾、ウェーバー⁽³⁾、シュムペーター Schumpeter, Joseph A.⁽⁴⁾ 等々の「経済史家たち」の著作に散見される複式簿記の機能の積極的——ときには明らかに過大でさえある——評価とはまさしく対照的に、彼はむしろ、その資本主義への貢献に対して消極的ないし否定的な評価をしか与えていないのであって、そしてしかも、このような彼の主張が、明らかに、その多年にわたる広汎かつ精密な簿記文献、簿記資料の研究に裏打ちされたものであればあるだけに、会計史研究の分野において、かなりの説得力と影響力をもちえたであろうことも、想像に難くないところなのである。事実、このことは、例えばウィンジャム Winjum, J. O. の 1972 年の著作、「英国の経済的發展における会計の役割、1500—1750 年 The Role of Accounting in the Economic Development of England: 1500-1750」のなかに、基本的にはヤーメイと同一の方法と見解を見出すことができるということからも、その一端をうかがうことができるであろう。

しかしながら、このようなヤーメイの見解に対しては、率直に言ってわたくしは、特にその方法的ないし理論的な観点において、なお若干の疑問を禁じえないものである。すなわち、その要点を一言でいえば、彼の見解は、少なくとも 18 世紀中葉までの複式簿記発達史の考察を、「簿記の狭い目的」の観点のみに限局する結果となるであろうということである。換言すれば、いうまでもないことではあろうが、複式簿記は、現実には資本主義企業の簿記として生成し発展した。したがって、その発展の過程を考察の対象とする場合にも、つねに、体系的な記録計算技術としての抽象的側面と、資本主義企業の簿記としての歴

(1) Yamey, B.S., "Scientific Bookkeeping and the Rise of Capitalism", in Baxter, W. T., *Studies in Accounting*, 1950, p.13.

(2) Sombart, W., *Der Moderne Kapitalismus*, 1924.

(3) Weber, M., *General Economic History*, 1927.

(4) Schumpeter, J., *Capitalism, Socialism and Democracy*, 1943.

史的側面と、この両者のいわば対立と統一の観点において考察することが何よりも必要であろうし、この両者を、あるいは機械的に分離し、あるいは無概念的に混同する限り、その程度に応じて現実過程の把握も、それだけ歪曲されざるをえないこととなるであろう。ヤーメイの見解についての問題点も、基本的にはまさしくこの点に関係するものとわたくしは考えるのである。

かくて、このような問題の意識に基づいて、以下、特に前掲49年の論稿を中心に、彼の所説に若干の検討を加えてみることにしよう。彼がここで考察の対象としてとりあげているのは、「株式会社の重要性の増大が、すでに会計の原理と実務に影響して、それらを更新し始める以前の、1840年代までに公刊された会計手引書」⁽⁵⁾、「パチオリ Pacioli, Luca の最初の印刷された研究が1494年に現れたのち、最初の三百年間に公刊された会計教科書に例示され論議されているような、複式簿記システムの初期の実務」⁽⁶⁾であり、特にその損益計算機能についてである。そしてまた、この点の考察は、あとで明らかとなるであろうように、この損益計算機能の評価のいかんによって、16世紀ヨーロッパ会計史の独自の意義についての評価も、また自ら変ってこざるをえないこととなるであろうという点で、看過することのできない問題でもあるのである。

Ⅱ ゾムバルトの見解

まず、立論の順序として、ヤーメイのいわゆる「経済史家たち」の見解を、特にゾムバルトの所説について確認しておくことにしよう。すなわち、ゾムバルトは、彼の大著、「近代資本主義、全ヨーロッパ経済生活の初めから現在までの歴史的、体系的記述 *Der moderne Kapitalismus, Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart*」の第2巻、「初期資本主義の時代、特に16, 17, 18世紀におけるヨーロッパの経済生活 *Das europäische Wirtschaftsleben in 16., 17. und 18. Jahrhundert*」の第10章、「資本主義企業の成立 *Die Ent-*

(5) Yamey, B.S., op. cit. (注1), p.15.

(6) Yamey, B.S., "Accounting and the Rise of Capitalism: Further Notes on a Theme by Sombart", in Yamey, B.S., *Essays on the History of Accounting*, 1978, p.118.

「*stehung der kapitalistischen Unternehmung*」において、「資本主義企業の形成に重要な意義をもったものは、秩序的簿記 *geordnete Buchhaltung oder Buchführung* の導入であった⁽⁷⁾」とする彼の主張を、大要、以下のように展開しているのである。

彼はまず、「複式簿記の本質的特徴」が、『在高勘定 *Bestandskonten*』と並んで、損益勘定と資本勘定が登場してきたときに初めて与えられたものであることを、つぎのように説明する。「複式簿記の本質的特徴——それは疑いもなく、企業資本の不断の循環を追跡して、数字的に把握し、帳簿的に確定することである——は、勘定の体系が完成されない限り、現れえない。われわれは、『在高勘定』と並んで、損益勘定と資本勘定が登場してきたときに初めて、そうなったことを知っている。……これらの勘定の導入とともに初めて、複式簿記によって把握されるべき資本の循環が、中断なしに、すなわち、資本勘定から在高勘定を経、損益勘定を通して資本勘定に回帰するというふうに、完成されるのである⁽⁸⁾」。そして、まさしくこのような複式簿記の本質についての透徹した認識のうえに立って、「複式簿記がヨーロッパ経済生活の経過に対して及ぼした影響」は、複式簿記によって、「資本主義経済制度に内在する営利の理念と経済的合理性の理念」の完全な開花をもたらすべき「可能性と刺激が創り出された⁽⁹⁾」点にあるものとして、つぎの説明がなされるのである。

まず営利の理念について。「複式簿記においては、純粹に量的に把握された価値額の増殖という単一の目的が存在するのみである。複式簿記に没頭するのは、すべての財貨と給付の性質を忘れ、欲望充足原則のすべての有機的制限を忘れ、唯一の営利理念をもって満たされるのである。彼がこの体系に通暁しようと思えば、そうせすにはいられない。彼は、船か船荷か、穀粉か綿花かを見るべきではなく、増減する価値額のみを排他的に見るべきである。……この観察方法とともに、資本概念一般が初めて創造される。したがってわれわれは、複式簿記以前には資本範疇はこの世に存在しなかったし、またそれなしに

(7) Sombart, W., *Der Moderne Kapitalismus*, 2. Band, 1928, S. 110.

(8) *Ibid.*, S. 114.

(9) *Ibid.*, S. 119.

は存在しないであろうということが出来る。われわれは、資本を、まさしく複式簿記とともに把握された営利財産と規定することができるのである」⁽¹⁰⁾。

つぎに、経済的合理性の理念について。「経済の合理化は、この合理化のひとつの現れとして、あらゆる経済経過の一般的計算可能性への傾向が登場してきた限りにおいて、複式簿記を通じて完全に実施されるのである。ここに、営利原則と合理化傾向との間に存在する緊密な関連が示されている。両者は、経済的世界を数字に分解する。前者はその増大を目的としておき、後者はその目的をより完全に実現するためにである」⁽¹¹⁾。「経済の合理化は、体系的簿記を通じてまた、それが活動しようと努める2つの別の方向に向っておし進められる。経営の合目的性と計画性とにまた、複式簿記が奉仕するのである。正当にひとは、それが初めて、ある経済組織におそらくはなお付着するであろう欠陥への洞察を与えるということ、したがってそれは、それによって初めて、営業の前進的、体系的な改善のための前提条件となるということを指示してきたのであった」⁽¹²⁾。「いまや、複式簿記が初めて資本の概念を創造することによって、それは同時に、一定資本の利用を目的とする経済組織、経済形態としての資本主義企業概念を創造するのである。然り、ここに資本主義企業の成立に際して、複式簿記の創造的協力が最も明瞭に現れるのである。われわれは、財産組織としての資本主義企業の本質が、営業の独立のなかに認められなければならないことを確定した。そしてこの営業の独立のために、いまや体系的簿記が抜群の貢献をするのである」⁽¹³⁾。

以上が、初期資本主義の時代における複式簿記の歴史的意義について、ゾムバルトの述べた所説の要である。そして、そこには、明らかに複式簿記の過大評価としか考えられないいくつかの論点が含まれていることも、確かに否定しえないところであろう。例えば、彼が、すでに見たように、「複式簿記以前には資本範疇はこの世に存在しなかったし、またそれなしには存在しないであ

(10) Ibid., SS. 119~20.

(11) Ibid., S. 120.

(12) Ibid., S. 121.

(13) Ibid., SS. 121~2.

ろう」と述べ、さらには、「資本主義企業の本質」たる「営業の独立」⁽¹⁴⁾、「企業主と企業との分離」のために複式簿記が「抜群の貢献」をしたと説いている点は、まさしくその適例をなすものともいうことができるであろう。けだし、いうまでもないことではあろうが、資本の概念は、一定の経済的、社会的関係の下において初めて成立しえた概念なのであるし、「営業の独立」の認識も、基本的には、複数出資者をもつ企業形態の歴史的な展開過程において、初めてその可能性が与えられたものと考えなければならないであろうからである。そして、特に後者の点に関連してわれわれは、複式簿記の損益勘定が、長期間にわたり、家事費その他の企業主個人に帰すべき損益諸項目をも包含するものとして与えられていたという歴史的事実——ヤーメイも、あとで詳細に見るであろうように、まさしくこの点に、当代の複式簿記の損益計算機能に対する彼の消極的評価の根拠のひとつを求めているのである——に、留意しておく必要があるであろう。

しかしながら、これらの諸点についての詳細な検討は、必ずしもここでのわれわれの直接の主題をなすものではない。われわれはむしろ、ゾムバルトに見られるこのような複式簿記の積極的評価が、果たして複式簿記のいかなる特徴、いかなる機能の認識に基づくものであるかという点をこそ問題としなければならないのであって、この意味においては、例えばヤーメイが、ここでの問題点を集約して、つぎのように述べている点に注目しなければならないであろう。「体系としての複式簿記によって、収入と支出の、そして諸取引の詳細と諸債権についての単純な情報——それは単式記入でも提供することができる——以上に、より多くのものが与えられる。それは、その諸勘定の枠内において、取引の体系的な分析を含んでいるのであり、そのことによって、その擁護者たちの主張するように、損益の計算、使用資本の計算、そしてその企業の財政状態についての計算書の作成が可能となっているのである。『科学的』簿記は、資本主義の発展において創始者、促進者、刺激者として作用した(個別的な強調に従って)という経済史家たちの命題において、彼らを選び出したもの

(14) Ibid., S. 123.

は、特に複式簿記のこれらの特殊な特徴なのである。したがってわれわれは、この初期の簿記家、著述家たちが、損益勘定、資本勘定、そして今日の貸借対照表の先駆たる残高勘定について、何を語ったかということを考察しなければならぬのである⁽¹⁵⁾」。

すなわち、ここでの問題の核心は、端的に言って、複式簿記に本来的に潜在する損益計算機能が、この初期資本主義の時代において、果たして現実に活用され、資本主義企業経営の現実の活力となりえたと考えることができるかどうかという点にあるのである。したがって、この点が実証されない限りでは、複式簿記に好意的なかの経済史家たちの結論も、ただ、「事實的証拠」なしに、「演繹的論理」のみに基づいた推定にすぎないとも批判されうるであろうし、あるいはまた、「複式簿記が今日用いられているのと同じ理由、同じ仕方でも、⁽¹⁶⁾」当時も「利用され評価されていた」という単純な類推によるものであるとも評されなければならないであろう。そして事実、ヤーメイは、16世紀から18世紀にわたるイギリスの簿記教科書の広汎な研究に基づいて、むしろ、当代の複式簿記が果たしたとされる現実の損益計算機能に、重大な疑問を提示してさえもいるのであって、このことの一端は、例えば彼のつぎのような結論的叙述を通して、明瞭に看取することができるであろう。

すなわち、彼はいう。「反対のことを示唆する実例も見出されるであろうが、われわれが考察している時期のたいていの商人たちは、複式記入によるにせよその他の方法によるにせよ、彼らの簿記を、彼らの資本と利益の規則的かつ正確な検査のために利用したのではなかった。利益と資本の正確な計算のための何らかの企図、あるいは資本もしくは利益の計算を体系化し純化するための一般的な努力の証拠は、乏しいのである。会計実務は、諸教科書から判断して、財産の『数量化』、利益と投下資本の比較、所有主と彼の企業との分離——それらは、会計が経済的合理主義に貢献した若干のより重要な仕方としてあげられてきた——を示唆してはいない⁽¹⁷⁾のである」。しからば彼は、果たしてどのよ

(15) Yamey, B.S., op. cit. (注1), pp.20~1.

(16) Cf. Winjum, J.O., The Role of Accounting in the Economic Development of England: 1500—1750, 1972, p.24.

うな論証の過程を経て、この結論に到達することができたのであろうか。この点を、さらに節を改めて考察してみることにしよう。

Ⅲ ヤーメイの見解

ヤーメイは、初期の簿記教科書の著者たちが、しばしば複式簿記の損益計算機能に言及しているという事実にもかかわらず、そのことのために複式簿記が利用されたとは考えられないということの主要な論拠として、会計帳簿はしばしばその記入が一杯になったときにのみ締め切られたという「損益計算の不規則性」をあげている。すなわち、以下の如くである。

「簿記家たちは、初期の時代から、複式簿記の特別の性質について知っていたという十分な証拠が存在する。パチャリは、損益勘定から、『あなたはあなたの損益が何であるかを知ることができるであろう』と述べ、そして資本金勘定から、『あなたはつねにあなたの財産が何であるかを知ることができるであろう』と述べている。残高勘定は、イムピン Ympyn Christoffels, Jan の 1543 年の『新たな教示 Nieuwe Instructie』以前には教科書に導入されてはいなかったのであるが、彼以後の教科書の著者たちは、『全体についての望ましい最後の言葉』たる残高勘定を、事業の資産、負債、資本、あるいは『純財産 Neat Estate』の総括とみなすことができるという事実を認識していたのであった。しかしながら、複式簿記のこれらの性質の認識は、複式簿記が特にそのために評価されていたとか、あるいは例えば残高勘定が、特に財政状態の表示のためにときどき作成されていたとかいうことの、決定的な証明とはならないのである。もしも利益と資本についてのこれらの計算表が、その商人にもたらす情報（おそらくは彼が、それ以外の方法では、持ちあるいは正当に認識することのなかったであろう情報）のために評価されていたのであれば、諸勘定は、商人が彼の状態と進歩を規則的、体系的に検閲することのできるように、規則的な間隔において締め切られたと期待するのが合理的であろう。諸教科書からの証拠は、決定的ではないにしても、諸勘定が規則的に締め切られたのではなくて、一般的に

(17) Yamey, B.S., op. cit. (注 1), p.26.

はただ、元帳ないし仕訳帳が一杯になったときにのみ、あるいは商人が新たな帳簿を持つことを望んだとき、あるいは何か特別の事情が帳簿の正式の締切を要求したときにのみ、締め切られたという結論に味方しているのである⁽¹⁸⁾。

そしてさらに、ヤーメイの考えるもうひとつの論拠として、そこに正確な損益計算への志向を見出すことができないという彼のつぎの説明をも引用しておく必要があるであろう。「もし彼(商人——引用者注)が、彼の残高勘定に彼の諸資産の真実の状態の反映を求めた(そして彼の損益計算書に彼の財産の総増加分の表示を求めた)とすれば、彼は、彼の諸資産——在庫品、建物、所有持分、冒険商業の利害、航海、委託、債権等々——の価値を、締切時に一般的な条件に照らして改訂することが必要であると気づくであろうし、勘定残高として示される『価額』を、単純に繰り越すだけというようなことはしないであろう。実務上、締切時における資産の評価替は、めったに行われなかったように思われる。その代わりに、勘定残高が改訂なしに(おそらくは物理的な検査とともにではあったであろうが)新帳簿に振り替えられたのであった。在庫品や固定資産の価額が、価額ないしその経済的有効性の変化を反映するように変更されることは、めったになかったのである。……ひき出されるべき推論は、商人は彼の残高勘定を彼の資産価値の計算表とは見なかったし、またそのように要求もしなかった⁽¹⁹⁾ということである」。

「損益勘定は、事業の損益の記入のほかに、雑多な諸記入を含んでいた。結婚持参金として受け取った貨幣、富くじで損をした(もしくは得をした)貨幣、家事費、個人的な引出等のための諸記入が、借方もしくは貸方として損益勘定に包含された。利益の注意深い計算と分析の証拠は、ほとんど存在していない。そして、事業を家庭の出来事から分離しようとする配慮の証拠は、より少なくさえあるのである。諸教科書は、慣習的な手続が損益勘定に示される利益の数字にいかなる影響を及ぼすかという問題への関心が、ひどく不足していることを示している。不良債権の普通の処理は、他の個所でより完全に説明した

(18) Ibid., p. 21.

(19) Ibid., p. 24.